

## 「さようなら下関市体育館解体現場見学会」報告

青年部長 中山 怜

みなさん、こんにちは。青年部長の中山です。この度は、10月19日(土)に下関市で行われました現場見学会の報告を致します。

今回の見学会は、旧下関市体育館の解体現場を見学する企画で解体中の現場を見学する初めての試みでした。参加者を募るうえでどこまでの関心が頂けるかと少々不安でしたが、メディアの方も含め40名の方に参加頂きました。北は青森県弘前市、南は長崎県佐世保市、他にも他県からかなりの方が参加下さいました。こちらの下関市体育館は、構造家の坪井善勝氏の手掛けられた唯一の作品であることは有名で、3つの屋根面は細長い二等辺三角形の上部屋根と2枚の側面屋根から成っており、2つの側面屋根は前面の傾斜した2本の柱から一つの数式で表現できる変形双曲放物面を描きながら、背面で逆反りとなって終わるといった特徴的な外観を持っており、その曲面を持つ屋根は、屋根材として30cm角のアルミ板で葺かれています。



【建物正面写真】



【内観写真】

1963年に竣工後61年間の役目を果たし今年9月より惜しまれつつも解体することになりました。



【解体現場の様子】



【美しい側面屋根】



【施工者による解体方法のレクチャーの様子】

見学会には、坪井先生を師事されていた構造家の斎藤公男先生も参加頂き、下関市体育館建設当時の思い出について語って頂く講演会を行いました。斎藤先生からは、当時11ヶ月と言うかなり短い期間で建設しなければならない難工事を担当

された苦労話や思い出話をされていました。質問では屋根について屋根仕上げ材がアルミ板になった経緯やアルミ屋根材の見事なグラデーションは偶然の産物だったと言う貴重なお話をして頂きました。斎藤先生にとってこの下関市体育館は思い出深い作品だったと改めて思いました。



【下関市体育館への思いを語る斎藤先生】

斎藤先生が言われていた言葉に『建物は、建つときは地鎮祭や上棟式と人が集まり祝ってもらう。しかし、無くなるときは囲いに囲まれ気づけばいつの間にか解体されている。建物も人間と同じようなもので葬式のようなものがあったり、皆に看取ってもらってもいいのではないかとありました。自分自身も同感でした。長年地元で愛されてきた建物が無くなっていくのは、やはり寂しいものです。私個人としても小さな時から体育館をよく利用してきましたので、今後、見られないと思うと残念でなりません。』



【既存体育館アルミ屋根材の再利用する説明】

既存屋根材を新総合体育館のエントランスホールに再利用するため慎重に撤去し、丁寧に洗いその後再加工し、一枚ずつ色見を確認しながら張ったそうです。現場は、大変な作業だったと思います。

今回の見学会は、今しかできないという思いから踏み切りましたが、開催した結果、参加者それぞれが、各思いを持って集まってもらえていたことが分かり開催して良かったなと思いました。参加者の中には、下関市新総合体育館のエントランスホールに既存体育館のアルミ屋根材を利用する計画の考案者もいまして、当時の思いや行政とのやりとりで尽力したことも知りました。ちなみにこの考案者さんは、見学会のために大阪府から来られたそうです。また、青森県の方は学生のころから下関市体育館を研究されていたようで見学会の話を聞いて『このタイミングを逃したら二度と見ることができなくなる。これは行くしかない！』と思って急遽下関へ来たそうです。その熱意に感銘を受けました。いつかは人も建築物も世代交代をしていくものかもしれませんが、やはり偉大な作品がなくなるのは悲しいものです。この日は、参加者との別れを惜しむように視察中雨が止みませんでした。



新総合体育館内には、旧下関市体育館のメモリアルコーナーを設けているので、時間がある時にも立ち寄ってください。

